なかよし親子が紡ぐ強くてやさしい伝統の革製品

丸山革具店

丸山革具店　二代目　革職人（写真右）
橋口　康隆氏

昭和37年9月1日生まれ。音楽ライブに参加するのが趣味。「仕事中も常に音楽を流しています」。

革職人（写真左）
橋口　志穂氏

平成5年9月25日生まれ。趣味は旅行。「見たことのない世界を知れるのが堪らなく好きです」。

工房へ一歩足を踏み入れると革の香りが広がるここは、1947年から谷山の地で皮革製品の製造・修理を行う『丸山革具店』だ。牛革や帆布のような厚もの製品を得意とし、現在は、電力・通信・鉄道・銀行業の特注かばんの製造などを中心に行っている。その丸山革具店の2代目として働く橋口康隆さんは、初代の長女（奥様）と結婚後、初代より継いでほしいと言われ、サラリーマンから革職人へ転身した異色の経歴を持つ。高校時代から服飾の製作などを学んだ志穂さんも、父の背中を追いかけ、アパレル業を経て1年前から康隆さんのもとで働き始めた。

そんな橋口さん親子と、絹織物の製造・加工を行う（有）中江絹織物が共同で製作した「糸芭蕉帆布ツールケース」。「2018かごしまの新特産品コンクール」にて、鹿児島県知事賞を受賞した同商品は、コンクールのわずか半年前に両社が出会い、製作が始まったという。「中江さんが作り出す糸芭蕉帆布はとても魅力的で、創作意欲が自然と湧きました」。使い勝手はもちろん、縫い目が見えないよう見栄えも試行錯誤して完成した商品の入賞が決定した瞬間は、涙があふれたそう。

丈夫で長持ちする製品を作ることが使命だと話す康隆さんの情熱は、世代や業種を超えて受け継がれることだろう。

彩り豊かなさつまあげが鹿児島の伝統の味を美味しく照らす

株式会社 髙浜蒲鉾

株式会社 髙浜蒲鉾
代表取締役 社長
髙濵　良太朗氏

昭和48年9月5日生まれ。いちき串木野市出身。「仕事の付き合い上、ゴルフをする機会が多いのですが、腕前は別としてゴルフ場に広がる景色を眺めるのが好きです」。

スイーツのように色鮮やかなさつまあげ―「2018かごしまの新特産品コンクール」食品部門において、鹿児島県知事賞を受賞した「吉之助キッチン」の商品だ。さつまあげ店の看板が数多く建ち並ぶ街・いちき串木野市で、昭和3年から創業している『髙浜蒲鉾』から、さつまあげの新たな形を提案する会社として今年3月に立ち上がったのが合同会社吉之助キッチンである。

髙浜蒲鉾の4代目として家業を継いだ髙濵良太朗さんが入社したのは、29歳の時のこと。以降、製造や営業に携わる中で感じていた、「練りもの売り場は洋菓子のような華やかさがない」という思いが新会社設立のきっかけになったという。鹿児島の素材を使った、見た目が鮮やかなさつまあげをコンセプトに、3～4年前に新たなさつまあげ作りへの挑戦がスタート。県内の特産物をひと通り集め、試行錯誤を繰り返した。「試作した9割以上が失敗という時期が長く続き、社員のやる気が下降気味になったこともありました」。ゆず皮や知覧緑茶など、彩りと風味豊かな8種のフレーバーは、そんな苦労を乗り越えて完成した珠玉の作品だ。

「伝統の味は髙浜蒲鉾として、そこに遊び心を加えたものを吉之助キッチンでこれからも作っていきたいです」と語る良太朗さんの挑戦は始まったばかりだ。